

宇治里〔あるひは菟道ともかけり〕都より行程四里にして、宇治橋の東は宇治郡、西は久世郡なり。むかし応神天皇第五の親王菟道稚郎子に帝位をゆづり給ふをかたく辞して、こゝに閑居し給ひ、宇治宮と号し、兄大鷦鷯皇子に譲り給ふ。是も又父帝の勅なきを位に即べきやうなしと、互に辞し給ひ、天子なき事三とせが間なり。遂に宇治宮みづから薨じ給ふによつて、兄の親子即位し給ふ、これを仁徳天皇と申すなり。又皇極天皇は大和国飛鳥宮より、近江の比良宮に行幸なるとて、宇治里に一夜泊らせ給ひ、尾花をかりて庵をつくらせ行宮となさしめ、これを宇治都といひ伝ける。

あすかがはらの御時あふみにみゆき侍けるに読侍る

新勅万葉 秋の野に尾花かりふきやどれりし菟道の都のかりほしぞ思ふ 額 田 主

続 古 尾花吹かりいほさむき秋風にうちの都は衣うつなり 顕 盛

新続 古 さ菴に霜をかさねてこよひもや衣うつらんうちの里人 雅 顕

抑宇治の名産は、氷魚、鱸、鰻、鮓〔一名宇治丸といふ〕円柿、茶磨、風炉の灰等なり。茶は本朝の極品にして天下に名高く、顧渚山の甘露にも鳳凰山の龍焙にも劣らざるの産物なり。むかし柵尾の明恵上人種を異国より得給ひ、脊振山に栽置てこれを岩上茶とぞ名づけたり。夫より宇治の風土茶園に可なりとてこゝに栽初しなり。